プロジェクトＡ調査報告

クビアカツヤカミキリ

松本吏樹郎

プロジェクトAで注目している昆虫の１つ、クビアカツヤカミキリを紹介します。体長30mmを超える、日本で見つかる種としてはかなり大型のカミキリで、体色も前胸背が赤色、それ以外は黒ととても特徴的です（**図１・12ページ**）。もともと中国からベトナム、朝鮮半島とその周辺地域に分布していましたが、2012年に日本（愛知県）に侵入しているのが初めて確認されました。大阪では2015年に大阪狭山市で初めて見つかり、そこから周辺地域に分布を拡大しています。昨年の記録では堺市まで北上しています。本種はサクラ、ウメ、モモなどの幹に卵を産み付け、幼虫がなかを食い荒らします。特に街路樹として植えられているソメイヨシノをはじめとするサクラで発生がみられ、本種の加害により枯れてしまう木もでてきています。日本人に馴染みの深いサクラが枯れてしまうだけでなく、梅や桃の産地は大きな脅威にさらされていると言えます。

本種の生息を確認する手がかりは大きく２つあります。１つは幼虫の出す木くず（フラス）です（**図２**）。加害された木の幼虫が入っている穴からは大量の木くずが出ます。これが根本に降り積もっていることも多く、とても目立ちます。２つ目は木の幹にとまっている成虫です。とても目立ちますので、散歩のついでにでもチェックする事ができるでしょう。クビアカツヤカミキリの脱出がはじまるのは６月以降で、このNature study７月号がみなさんの手もとに届くころが、成虫の活動の最盛期となります。木くずの方も６月から秋まで出ます。

図２：クビアカツヤカミキリ幼虫が出したフラス。

いつ、どこで、見つけたのかという情報が本種の分布拡大の様子を把握する貴重なデータとなりますので、もし見かけたら、博物館まで情報をお寄せください。できるだけ画像や虫そのものの標本も一緒に見せていただけると確実です。ただし本種は今年に入って特定外来種に指定されましたので、生きたまま移動させることはできません。ご注意ください。

＜**まつもと　りきお**：博物館学芸員＞

図１：クビアカツヤカミキリ成虫。（本文は５ページ）